

基調講演

「冬季スポーツ科学研究のこれから」

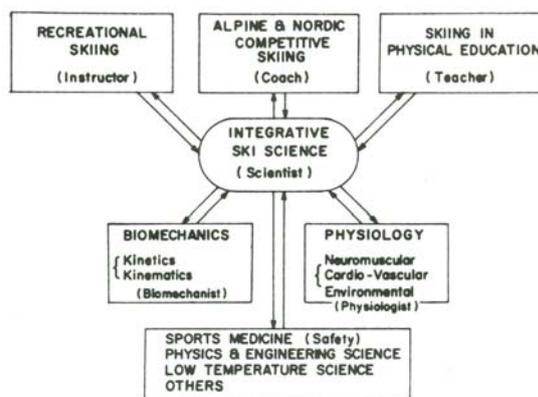
渡部和彦（広島大学名誉教授）

冬季スポーツ科学研究会は、このたびの信州大学での学会開催で19回（19年）目を迎えます。この間、さまざまな研究が発表されてきました。いくつかのシンポジウムも開催されました。また、長野オリンピックにおける、IOC 医事委員会として行った、「スポーツ科学教育研究プロジェクト」は、研究会として組織的な取り組みを行いました。最近では、「2007 FIS Nordic Ski World Cup Sapporo」を記念して、川初清典先生（北大）を中心に国際会議が成功裏に開催されました。

演者自身の研究は、主としてスキー種目ですが、「スキー科学」が学問としての発展することを夢見ておりました。学問になるためには、研究方法が必要です。そこで、スキー科学の基礎的学問として、生理学（神経生理学、心臓・血管系、環境生理学）およびバイオメカニクス（動作学、運動力学）の研究を考えました。それらを統合した「スキー科学研究（研究者）」を意識し、指導現場である、レクリエーションとしてのスキー（インストラクター）、競技スキー（コーチ）、体育におけるスキー（教師）を位置づける構図を描きました（図参照）。これは、わが国におけるスキー研究の流れから発想したものです。

冬季スポーツにかかわるそれぞれの種目で、同様のことが考えられるのではないかと思います。

これまでの研究会の活動の流れは、会員個々人の活動や、グループの研究活動の発表の場として機能してきたと同時に、その時々的重要と思われる課題について、「フォーラム」の名にふさわしく、シンポジウムなどの企画でアクセントをつけてきたように思われます。また、研究対象は、それぞれのスポーツ種目を通じて、トップレベルの選手に対する競技力向上に関する研究が多かったように思われます。



これからも、このような研究の発表が期待されますが、演者としては、これまでもいくつかの報告があったように、福祉関係の研究（チェアスキー研究など）、学校体育関係、高齢者の健康スポーツ、地域住民の健康づくり、地域活性化のスポーツなど、研究会としては、幅広い貢献が望まれると思います。とくに、地球環境の温暖化に関しては、研究会としてのアピールを何らかの形ですべきであると思います。

来る20周年を期に、これまでの活動を踏まえ、研究会のあり方、社会貢献のあり方などについて、新しい視点から考えてみる良い時期にあるのではないのでしょうか。